



瀬尾憲正院長

# 商店街の診療所

商店街が運営し、歩いて通院できる。  
予防から緩和ケアまで広くカバー。

取材・構成 恵原真知子

診療所は、地権者の一部が作る共同出資会社が、商店街にあるビルの四、五階を購入し、内装等を整備した。総面積約三百二十坪、高級ホテルのようなインテ

「美術館北通り診療所」開設を計画に組み入れ、十月にオープンした。

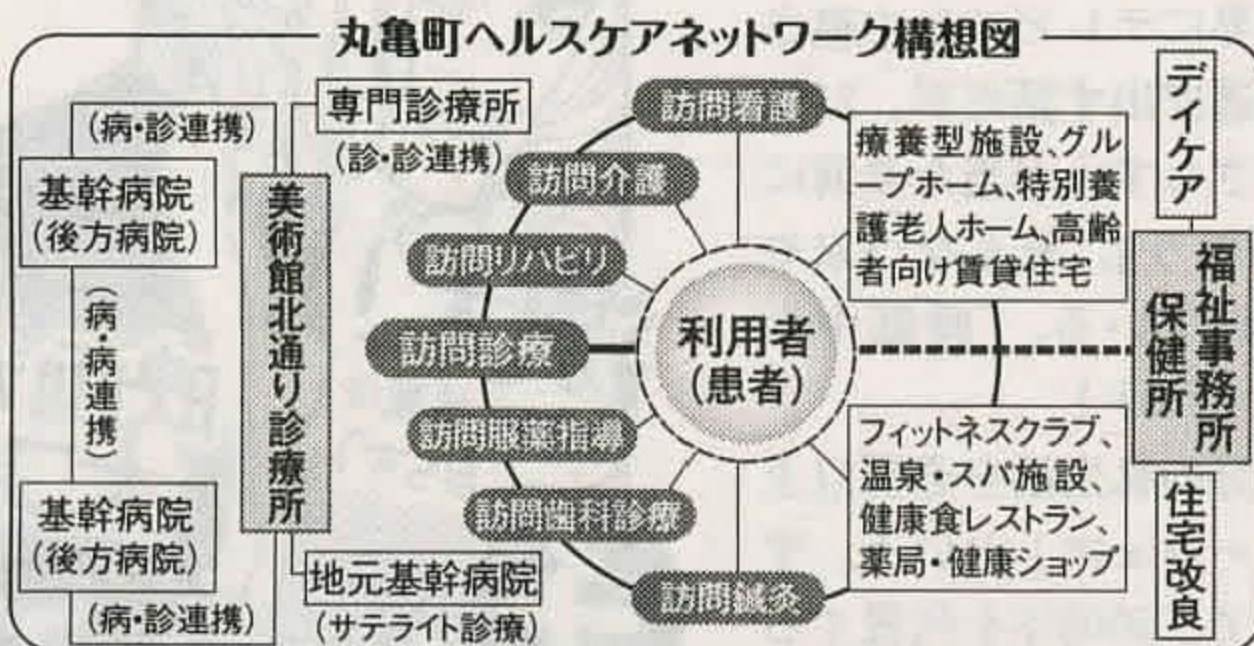
診療所は、地権者の一部が作る共同出資会社が、商店街にあるビルの四、五階を購入し、内装等を整備した。総面積約三百二十坪、高級ホテルのようなインテ

各地で、中心市街地から郊外に移り住む人が増えるのに伴って、中心部は居住者が減る空洞化や、シャッター商店街問題が起きてい

一日通行量約九万人という四国最多を誇る高松市の中央商店街とて例外ではない。そのアーケード総延長約二・七キロ（日本一）の下に約千の小売店や飲食店が軒を連ね、中核的な丸亀町商店街にはブランド店など高級品を扱う店も多いが、やはり空洞化は避けがたく進行している。

高松丸亀町商店街振興組合（古川康造理事長）は、郊外や他地域から居住者を呼び戻そうと大規模な市街地再開発に着手。マンション建設などを進めるなか、地域医療の拠点にしようと「美術館北通り診療所」開設を計画に組み入れ、十月にオープンした。

こそ住みやすい街。歩いて通えるこの診療所のコンセプトは、ホテルと家庭の中間の機能と雰囲気をもたせること。この街で、治療一辺倒の医療を脱し、文化的で安心安全な医療を提供し



「高齢者にとっては『車を使わず歩いて暮らせる街』」

「高松市は、これを医師に貸す形で運営される。Uターン先発組の一人として、院長の白羽の矢が立った瀬尾憲正医師（今夏まで自治医科大学麻酔科教授）を訪ねた。

ていきたいと思います」

当面三人の常勤医師で一般内科、痛みの診療科、循環器内科、眼科、循環器リハビリ、健康診断を担い、地元基幹病院のサテライト診療として女性泌尿器科、糖尿病外来、物忘れ外来などの専門外来も計画だ。

この診療所のどこが新しいのか。それは、病院内で終始していた医療から、隣接する病院や診療所をはじめめ介護・福祉関連施設、健康増進に関わる街の施設等との連携も視野に入れ、予防から通院、在宅医療を切れ目なくつなぐ「丸亀町ヘルスケアネットワーク」（上図）づくりを進めている点だ。

また、お薬手帳のように、患者の症状やそれに対する治療履歴を記録する「いのちの手帳」を配布している。今は紙製の冊子だが、いずれはカード一枚でいつでもどこでも記録を引き出せるIT化を目指すとのこと。

医師や患者を孤立させない

この診療所のどこが新しいのか。それは、病院内で終始していた医療から、隣接する病院や診療所をはじめめ介護・福祉関連施設、健康増進に関わる街の施設等との連携も視野に入れ、予防から通院、在宅医療を切れ目なくつなぐ「丸亀町ヘルスケアネットワーク」（上図）づくりを進めている点だ。

代がポチポチ介護される側に回り、シングルの高齢者も増え、ベッド数不足の病院は入院も難しくなる。否が応でも在宅医療を充実させなければ、医療難民の群れができてしまう。全国津々浦々まで待ったなしの対応に迫られている。

「自治医大は僻地医療の担い手育成を使命とし、私も日常診療と後進を育てることとで役割を果たしてきました。一方で僻地化した市街地の医療再生に尽力することもまた私の使命という結論に達し、帰りなんいぎ高松へ、と定年間際での退職を決めました」

商店街運営のよさは、一医師の開業と違って医師が孤軍奮闘しなくてもすむことだ。また、商店街を行き来するような暮らしは、昨今話題の無縁社会とは逆で、つかず離れず誰かの目がある。子どもにも、子育て中の親にも心強いコミュニティになる。想像以上に様々な可能性も秘めているようだ。

まず先発モデルの成功を祈ろう。